

# ひとくち法話

## 第十一回

### 意味もわからぬ名前の響き

熱田区・淳徳寺 伊藤 耕

私には五歳の息子がいる。現在は幼稚園に通う年中さん。その息子と近所のコンビニにアイスクリームを買いに行く道すがら話をした。

「今日は、幼稚園で何をして遊んだの？」

「今日はね、〇〇ちゃんと〇〇ちゃんと一緒に積み木で遊んだよ。」

「そっか。女の子ばかりだね。笑」

「うん！楽しかった！」

この時の息子の表情が、やけにニヤついて見えたのは気のせいではないはず。

しかし、女の子とばかり遊んでいるチャライ息子の笑顔は、なんとも愛おしく、同時に幼少期の自分の姿と重なり、とても恥ずかしい気持ちになった。また、男同士の他愛のない会話ができるようになり、お友達の名前が言葉となって出てくるようになったことにも驚いた。

世の中にある「もの・こと」には、大抵「名前」がついている。「もの」で言えば「椅子」や「机」。「こと」で言えばスポーツは競技名として「野球」などの名前がついている。私たちは、社会を生きていく中でごく自然に多くの名前と接し、他者と共通認識を持つための伝達手段として活用している。そして、初めて触れた時には意味もわからなかった多くの「もの・こと」たちは、その「名前」を覚えたことをきっかけとして、私と関係を結ぶ。息子との会話の中であらためて気付かされたことである。

さて、「respect others (リスペクトアザーズ)」という言葉をご存知だろうか。「他者を尊重する」という意味の言葉は、アメリカの教育の場で使われており、他者への尊重を欠き、つい怒りたくなるような場面（例えば、スポーツでのイーजीミスなど）で、大人たちが子どもに対しての“いましめ”として発する言葉だそうである。意味もわからない小さな頃から教えられるようで、今も根強く残る厳しい人種差別と向き合ってきた人たちが、尊重合い、共存することができる社会を実現しようとする時の「合言葉」でもあり、同時に「反省」でもあるのだろう。

この言葉は、お釈迦様がお生まれになった時言い放ったとされる、「天上天下唯我独尊」という言葉といくらか似たようなニュアンスを感じ取れるし、「本当に尊いこと（本尊）」としていただいている、誰一人摘み残さず救うという願いの言葉、「南無阿弥陀仏」との接続も感じる。

「コロナ禍」と呼ばれる、差別や貧困が横行する現代社会の中で、それらを無意識的に温存・助長していることに対して「反省」を促すとともに、尊重し合い、共存する社会を実現しようとする「願い」として、子どもの頃は意味もわからなかった（今もわかった気になっているだけかもしれないが…）「南無阿弥陀仏」が、今こそ切実な響きで語りかけてくる。

チャライ息子が大人になった時、互いに尊重し、大好きな彼女との話をニヤつきながら話し合えることを楽しみに、日常に溢れる多くの「もの・こと」の名前とその意味に耳を傾け、聞いていきたいものである。